

ロレンスの悲劇

富 永 昭

1929年2月5日付のオットリーヌ・モレル夫人に宛てたロレンスの手紙の中に次のような一節がある。

私の世界は普通人の世界と違って、私は第六感を持った一種の動物なのだ、マリーが言っていますが、あなたは馬鹿げたことだと思いいになりませんか。私にはむしろ、彼こそ四つの感覚しか持たぬ、つまり真の意味の触覚の欠落した一種の動物だと思われます。人は皆私を奇型児にして自分自身の欠陥を繕い、その欠陥を‘正常な姿’に見せようとかかっているようです。

マリーとはロレンスと親交のあった批評家 John Middleton Murry である。そして同年5月20日には当のマリーに次のような手紙を出している。

君も知るとおり、僕のすべての痼癥と‘構うもんか’という態度はともかくとして、君の言葉を借りれば、我々が‘過っていた’ことは僕もよく分っている。僕は君を理解していないし、僕には君の仕事が分らない。そして君も僕が分っていない。僕の詩を評して君は、‘これは人生ではない、人生はこんなものじゃない’と言ったね。君は本当の僕自身に対しても同じ態度をと

っているのだ。人生はこんなものじゃない、故に、こんな動物は存在しない。従って僕も‘構うもんか’という気持ちになるのだ。僕とただ違う動物というにすぎない動物に、こんな動物は存在しない、と言われるのに僕はうんざりしているのだ。（中略）そして君が愛しているという僕は僕ではなくて、君の想像上の偶像にすぎないのだ。僕の言うことを信じ給え、君は僕を愛してなどいないのだ。僕という動物を君を本能的に嫌っているのだ。（中略）そして君達は皆言うのだ、そんな動物は存在しないし、もし存在していても存在すべきではないのだ、と。それなら、君はなぜ自分のいるべき場所をしっかりと守っていないのだ。もし僕が君の生涯に於ける唯一の人間であるなら、それは僕が僕であるからではなく、君が想像上の人物を結晶させた一片の土くれを僕が提供したからにすぎないのだ。僕達はお互いを知っていないのだ。どれほど知っていないか君が分ってくればいいのだが。偽りはどうやめようじゃないか。昔は少々偽ることによっていくらか楽しい時をすごしてきた。だが、我々は皆少しは偽らざるを得なかったのだ、そして、誰もそれを維持することはできなかったのだ。僕の言うことを信じ給え、僕達二人は違った世界、違った意識の方法に属しているのだ。互になし得る最善のことは永久に互を放っておくことだ。我々は不協和音なのだ。

これは永い間の親友であったマリーとの訣別の状である。ロレンスがマリーに送った友情あふれる手紙も無数にある。1929年といえば、ロレンスの死の前年であり、彼は作家としての仕事をすべて成し遂げている。勿論彼は目前に死を予感してはいなかっただろうが。それにしても、この手紙を書くことによってロレンスは深く傷ついたであろう。友人を失うことだけではない。自分を取りまく殆んどすべての人間、極言すれば、世界そのものと袂を分かたねばならなくなった自分の宿命に肅然たる思いをいたしたに相違ない。この二つの手紙はロレンスの人間及び文学の本質を考える上で極めて象徴的なものであるが、それが晩年のものであることが特に痛ましく思われる。

マリーに限らず、ロレンスに接した人間は殆んどすべて彼に魅了され、彼を

愛したのである。そして彼もその次元で彼等を受したのである。龐大な量に及ぶ書簡が何よりもそれを物語っている。だが、ロレンスは別の次元の世界を持っていたのだ。そしてそれこそが彼の生命を賭した世界なのであった。その世界に全人類が生きていくことが彼の願いであり、その世界の真理たることを説くのが彼の一生の仕事であった。だが、終始その世界には自分一人しかいなかった。彼の書簡は人間に対する愛情と憎悪に満ちている。それは必然的に彼の周囲の人間の彼に対する愛情と憎悪を生み出したのだ。マリーも彼に劣らず傷ついたのである。

ロレンスは普通人の感じ得ない世界を感得する能力を備えていた。それは彼の作品が証明している。彼が独特の感受性で描いた人間や自然、或はその連関はすべて真実である。むしろしばしば、余りに真実でありすぎるのだ、普通人にとっては。その真実に耐え得る力を現代人は失っている。彼の感受性が体験し表現してゆくものの強烈さは真実のみが持つ強烈さであり、その真実の豊かさに読者は感動しないわけにはゆかないのだが、自分達の日常の体験を超えて飛翔したり、体験の下で暗黒に沈潜してゆくと、恐怖におびえてしまう。ロレンスの感受性の豊かさは普通人のそれと比べて単なる同質内での豊かさとは違っている。その豊かさはつき進んでゆくと、どこかで質を変じて、彼の人間観、人生観、世界観、果ては宇宙観をも構築するような本質的な超絶性を帯びるのである。日常の世界から僅かに足を踏み入れて彼の世界を垣間見るにすぎない普通人は、そこに唐突に、或は異常に飛躍した世界を自分と隔絶されたものとして見せられることになる。それはむしろ、自分達を弾劾し否定する世界にすら思われる。それはロレンスのなした仕事から見れば、文学が思想に転じた地点ということになる。こうして一般読者は彼の文学と思想を別々に考えるようになる。小説家としては偉大だが、その説教にはついてゆけない、という立場がそれである。世間的な意味での作家としてのロレンスの不幸はそこにある。だが忘れてならないことは、彼の思想は決して飛躍から生まれたものではないということである。現代に足を踏まえた彼の感受性が導いた思想であることを銘記せねばならない。現代人が彼に怯えるのは、むしろそのためであると

言ってもよい。つまり否定し難く真理の重圧がかかっているのである。ロレンスの友人達も、当時及びその後の読者達も、彼に背を向けようとする時、いつもその真理の重圧を背に感じずにはいられない筈である。それが、ロレンスを知ったものの宿命である。マリーもそうであつたに違いない。

「僕という動物を君は本能的に (instinctively) に嫌っているのだ」とロレンスはマリーに言っている。実は、逆も真なり、と言ひ得る。モレル夫人への手紙で彼は、「彼こそ真の意味の触覚の欠落した動物に思われます」と言っている。ここでロレンスが言っている「真の意味の」という形容は単に生物学でいう、味覚、視覚、聴覚等と同列の器官の機能を言っているのではない。それは、彼が作品の中で幾度となく描写してきた、生命と生命の裸の触れ合い (skin to skin touch) に耐え得る本能的な力を言うのである。その欠落した人間をロレンスは「本能的に嫌う」のである。そこから両者の超え難い隔絶が生じる。ロレンスは自分に宿る力を信じていた。だが彼等は又元に戻ってしまうのである。同じくロレンスと永い親交のあったオールダス・ハックスリーはロレンス書簡集の序文で次のように言っている。

ロレンスと一緒にいることは一種の冒険であり、新しきもの、他者なるものへの発見の航海であつた。というのは、彼自身が異った種類の存在だったので、彼は普通の人間とは異なつた宇宙に住んでゐたからだ。それは、より明るく、より強烈な世界であり、彼が話している間、人を自由にその世界に遊ばせてくれるのであつた。彼のものを見る眼は、死の瀬戸際にそれまでいた人間がその暗黒から浮かび上ってくる時に、世界が測り知れぬ美と神秘をもって彼の前に姿を現わしてくる、というようなそういう眼であつた。ロレンスにとっては、存在とは一つの継続的な、病の癒えてゆく状態であり、あたかも日一日と死の病から新しく再生してゆくかの如くであつた。彼のほんの些細な言葉もこの病の癒えてゆく人間の眼に映るものを啓示してくれるのであつた。彼と共に田舎を歩くことは、彼のすべての小説の背景でもあり主要人物でもあつたあの驚くべき豊かさと深い意味を湛えた風景の中を歩くこ

とであった。彼は肉体的な体験によって、一本の木であり、一輪のひな菊であり、砕けゆく波であること、そしてあの神秘的な月ですらあることがどんなことであるのかを知っているようだった。彼は動物の肌の中に入って、その動物がどのように感じるのか、人間とは違った風にどういう具合にその動物がぼんやり思考をめぐらしているのか、を語ることが出来た。

これはハックスリー自身の体験であると同時に、ロレンスが作品の中で読者に体験させてくれることでもある。彼が自由にその世界に人を遊ばせてくれることは、彼の感受性の豊かさと寛容さを表わしている。それはロレンスの根源的な偉大さそのものである。彼を通して万物が生命を帯びる。それは確かに潑刺とした生の冒険である。その本質は奇蹟である。他の生命と触れ合う奇蹟である。触れ合うとは二者の関係の認識をいうのではなく、互の本質に従って生きている孤立の儘で向い合うことである。触れ合いはそこから必然的に生ずる本質である。本質的な生命は互に接触し合いそこに喜びを感じずる。他者への要求はそこにはない。要求は他者の分析と、自己との関係の認識を前提としている。生命の本質はあるが儘にあることであって、分析や認識は無縁のものである。ロレンスはそういう世界に人を誘う能力を有していた。それは彼自身があるが儘にある生命の本質を有していたからであり、万物や他の人間の生命の本質がそれに呼応するのは又生命の本質による必然なのであった。

彼は確かに生き生きした喜ばしい世界に人を誘うことはできた。だが、個人的にも社会的にも常識の世界に浸り切っている現代人は、彼の導く世界、彼の説く世界の極限を予感して怯えるのである。それは、現代人として身につけている財宝の殆んどすべてを無意味に帰し、裸の儘原始の世界に戻ることを要求しているように思われた。ロレンスは自分の内的生命の発露だけで満足できる人間ではなかった。彼は集団的自我というものを重要視していて、個々の肉体に宿っている筈の生命は集団的に一つになろうとする本性を備えていると考えていた。それはロレンスの宗教的情熱の一面であるということもでき、決して個を抹消することではなく、宇宙という根源的な存在に帰ることを個々の生命

の本性と考えていたからである。彼は現代のあらゆる問題をその視点からしか捉えようとしなかった。まだ若い頃、反戦という基本的立場でパートランド・ラッセルと意気投合し、ある種の社会活動を考えたことがあった。やがて二人は訣別するのだが、ロレンスに言わせれば、ラッセルは自分自身の既成の自我を守りたいだけであり、限定され規定された自我を他者との接触から孤立させて損傷から保護し、自己完結した小さな絶対世界を抱いていたのだ、ということになる。それがラッセル等のいう平和であり民主主義なのだ。ロレンスに言わせれば、そうした空しい外的組織によってしか守られない個人の世界は実は虚無であって、行きつくところは破滅に他ならない。守るべきものを何も有していないからである。現代人は生命喪失の虚無を一時的にしろ解消し、束の間にもせよ飢餓を満たすためにロレンスを利用するにすぎない。彼等は自分の矮小な古くさい自我を捨てる意志も勇気もない。それがロレンスの見た現代人であった。1915年8月16日のシンシア・アスキス夫人に宛てた手紙で、彼はラッセルとの訣別を語ったあと、次のように言っている。

……彼等は裏切者なのです。本当の真理を裏切っているのです。彼等は私の所にやって来て私に話をさせます。彼等は楽しんで聴きます。私の話は深く彼等の感覚を満足させるのです。それだけです。まるで私の言うことには個性の香りがあって彼等に満足を与えるだけの意味しかないようで、私はケーキがワインかプリンのようなものです。それから彼等は、D. H. L. は素晴らしい、並ぶもののない価値ある個性だ、と言います。それから、私の言うことは気狂い沙汰だ、幻想だと言うのです。彼等に言わせると、私は思考することができないのです。

この世の動的なものをすべてを彼等は一つの感覚に訴えるもの、つまり、静的なものの満足に変えてしまうのです。彼等はあくまで静的なのです。彼等はやって来て、‘君は素晴らしい、君はダイナミックだ’と言い、それから私の生命を盗み取って自分達の感覚の満足に変えてしまうのです。私の生命である私の努力をすべて欺いてしまう彼等はユダのような人間です。すべてを自

分の静的な自己に、静的な虚無に変えてしまうのです。その結果、彼等にとっては感覚の満足、一種のくすぐりみたいなものとなり、私は文字通り血を流すことになるのです。

もう彼等の正体は分りました。それで沢山です。

ここで「彼等」と呼ばれているような人間の本質はさまざまな形でロレンスの作品に登場している。『虹』のアントン・スクレペンスキーがそうであるし、『恋する女たち』のジェラルド・クリッチ、『チャタレー夫人の恋人』のクリフォード・チャタレーもそうである。その他無数に挙げることができる。だが最も明晰で、ロレンスにとって決定的だったのは実は『息子と恋人』のミリアムである。彼女はボールの生命を通して自然の生命に触れ、それによって自分も生きようとする。だが、彼女はボールを自分によって生きさせることはできない。彼女はボールを利用するだけである。この手紙を書いた時は既に『息子と恋人』は完成していたし、ロレンスがミリアムのモデルとなったジェシー・チェーンバースを「彼等」のうちの一人の如き人間と考えていたがどうかは分らない。だが重要なことは作家活動のほぼ出発点から、彼が自分と周囲の人物との関係の中にある本質を直感していたことである。当初から彼の活動は闘争という本質を持っていたのである。思えば、作者によって肯定されている人物すら何らかの形で心に苛立ちを抱かされていることに読者は気づくのである。ほぼ晩年に書かれた「自伝的スケッチ」の中で、「私が次のようなことを真剣に自らに問うようになったのはアメリカから帰ってからのことである。‘私自身と私の知人達との間に接触がこれ程にも少いのは何故なのか？ 生命に溢れた意味がそこにはないのは何故だろうか’」と言っている。彼が初めてアメリカを訪れたのは1923年である。既に多くの傑作が書かれた後である。「真剣に」と彼は言っているが、それは彼が労働者階級の出であり、現実には中産階級の人間と接触することが多く、世は中産階級的なものが巾をきかしていることに思いが至ったことをさしているように思われる。彼は続けて、中産階級の人間は、「私の生命の震動のいく分かを切り取ってしまうように感じられ」「私の中の

ある部分が活動することを阻止してしまう。そのある部分を取り除いてしまわねばならないということになるのだ」と言っている。「中産階級的なもの」というロレンスの言い方には深い意味が含まれている。生活様式、信仰や信条は勿論、民主主義や科学というような文明史的な視野に立ったものもそこに暗示されていると思われる。

ハックスリーはロレンスのものの観方を神秘的唯物論と呼んで、「彼は、彼と同じく世界の神秘に絶え間なく直面している偉大な哲学者や科学者といった他の人達と違って、既に光に照らし出された領域を拡大することを欲しなかった。彼は外の暗闇を是認し、そこに安らぎを感じていたのだ」と言っている。そして、ロレンスが進化論を拒絶して、ハックスリーが「証拠を見ろ」と言った時、ロレンスは、「証拠などはどうでもよいのだ。証拠などは僕には何の意味もない。僕のここがそれを感じないのだ」と言って彼の言ういわゆる太陽叢 (solar plexus) に両手を当てたという。太陽叢とは、『精神分析と無意識』や『無意識の幻想』に於ける彼の説明によれば、受胎によって母体と結合するへその緒の存在する下腹部の交感神経の中樞を言い、人間の最も根源的な無意識の生命感の始動するところである。ロレンスが科学を嫌うのはそれが理智による分析を旨とする作業であるからだ。『アポカリプス論』の中で次のように言っている。

科学が火について教えてくれたことをひっくり返してみても、火を変えてしまうことはいささかもできない。燃焼の過程は火そのものではない。それは思考形態である。 H_2O は水ではなく、水についての実験から導かれた思考形態である。思考形態は思考形態であって、我々の生命を造りはしない。

ここでロレンスの言いたいことは、水の構成が H_2O であることを否定することではなく、 H_2O であることをつきとめる知的作業を人間の崇高な行為であるとする虚偽を問題にしている。それは本質的な生命の発露とは無縁のものであって、その繰り返しはやがて魂の倦怠を生み出し、生命そのものによる復

響を受ける。生命の発露は流動的なものであるのに反し、知的作業は個々に完結する、他者との触れ合いのない閉塞性を持っている。同じ書物の中でロレンスは、「理智の大きな特性は終結性にある。理智は‘理解する’、そしてそれで終りである。だが、人間の情感的意識は理智的意識とは全く異った生命と動きを持っている。理智は部分部分において認識するだけで、文章毎にフル・ストップがある。だが、情感的魂は全体において認識し、一個の河や洪水の如くである」と言っている。常に流動するものには倦怠はあり得ない。理智や観念は脳の働きであるが、『精神分析と無意識』によれば、「観念的意識というものは吐き出された糸のような意識の死せる末端であり、」それは人間の意識の中のほんの一部を占めるにすぎない。現代人はそのほんの一部にすぎない意識を肥大化させてその重圧に喘いでいる。そして理智の働きの中には、機械のリズムのような、生命を抑圧して摩滅させ、破滅に至るまで止むことを知らない単調な繰り返しの恐ろしさがひそんでいる。現代に於ては、生命は束の間の開放を与える気安めに墮し、人間は機械的な死のリズムに巻き込まれて、一時でもその歯車から逃れると自力で立つことのできない傀儡になっている。魂は常に空虚である。1928年に書かれた「人間の生活における讃歌」と題する小文の中に次のような一節がある。

知識に基づき、経験に敵対する現代文明の巨大な致命的な果実は今や倦怠である。我々の素晴らしい教育と学習全体が倦怠という巨大な集積を生み出しつつある。現代人は内面に於て完全に退屈している。何をなそうと退屈なのだ。

ロレンスは、人間が常に生き生きとした存在であるためには自分の中にある無意識の衝動、暗闇からの声を信じて従わねばならない、と考えていた。そうした人物は作品の中に効果的にしばしば描かれていて、作品の世界に温い充実した存在感を与えている。特に短篇にそれを分りやすく感じることができる。

「乾し草の中の恋」「次善の男」「春の陰翳」など、ロレンスが必ずしも自分の

思想をはっきり意識する以前の作品において、ジョフリー、トム、ヒルダのような人物を通して、彼の思想が単なる思索の結果ではなく、天性の感受性による直感の産物であることがうかがえる。彼の思索の言葉はむしろ後から出てくるものなのである。

「書物」と題する小文の中でロレンスは、「意識の中を探検することは、永遠に危険な白昼の谷間を永く果てしなく歩くことなのだ」と言っている。すべてが白日のもとに晒し出された世界は、何の神秘もない死んだ世界である。その単調さは苛立ちと退屈を生み出すだけである。ロレンスは人類をそこに導いたものを憎悪した。ここで言われている意識とは理智的な意識の意味である。

『アポカリプス論』の中では、「我々の意識の領域は広大になった。だが、それは一枚の紙のごとく薄っぺらである」と断じている。

ロレンスは古代の異教的世界を夢想していた。それは、太陽と月をはじめ、天体が人間の生活に象徴的意味を持つ立体的な世界であった。そこには、人間すら天体の一つと考えられるほどの調和と充実を誇る壮大な世界があった。彼の考えたその世界の特質は『アポカリプス論』によると次の如くである。「古代人の知識は、現代人の如く理性によってではなく、本能と直感によって直かに到達される底知れぬ深さを持っており、言葉ではなく映像に基づいたものであった。彼等の抽象作業は、普遍化したり特性化したりすることではなく、象徴化することであった。物事の連関は、論理によらず情動によって考えられた。」象徴化というのは、古代人があくまで具象の世界を離れなかったことを意味している。彼等は具体的なものしか信じなかった。天体はその最も高度なものと考えられた。「古代人の意識は何かが始まるのを見ることによって動いたことを忘れてはならない。すべては具体的で、抽象物は存在しないのだ。すべてのものが何かを行うのである。」従って、実体のあるもの、五官で捉えうるものを彼等は崇めた。彼等の世界では、そうした実体で構成されている広大な空間の調和が人間の生活を規定しており、道徳というような陰微なものは存在しなかった。自らの生命を太陽の生命の一部として信じ、天体と自分達の間に働くメカニズムの生動的な力を直感することによって生を充足することができ

た。彼等には一切を含有し決定づけるような抽象的、概念的な思考というもの
はなかった。彼等の思考はそれぞれの具象に基づいて、驚異と新鮮な感情によ
ってなされ、一つ一つが新しい体験としての独立した生きた行為であった。従
って退屈などというものは存在し得ない。論理の無味乾燥な冷たさはなく、彼
等の思想は直感と感情の度重なる発動による深まりを意味していた。「古代世
界は極めて宗教的でありながら、全く神のない世界であった。人間がまだ空飛
ぶ鳥のように緊密な肉体的結合の中で、つまり、個人が殆んど分離されていな
い古代の部族連帯の中で生き、その部族が、言わば、宇宙と胸を接して裸の触
れ合いの中で生き、宇宙全体が生命をもって人間の肉体と接触していた頃
には、神という観念が入り込む余地はなかったのである。」ロレンスにとって宗
教的とは、根源に遡ろうとする本能を言う。古代にあっては、宇宙そのものが
根源であって、人間と宇宙を結ぶものは肉であり血であった。両者は共に生命
によって結ばれていた。観念としての神は発想されることすらなかった。強い
て神という言葉を使えば、宇宙という形象そのもの、或は、個々の天体から地
上の小さな物体に至るまで、実体あるものが神であった。

1927年8月3日の心理学者トリガント・パロウに宛てた手紙でロレンスは次
のように言っている。

人間は、仲間の人間との関連以前に、何らかの‘宗教的な’意味で宇宙に
結びついていると私は考えます。そして、人間同士の真の結びつきを得る唯
一の方法は、何らかの共通の‘信仰’の中で出会うことだと考えます。たと
えその信仰が肉体的なものにすぎず、単なる精神的なものでなくともよいの
です。私もあなたと同様宗教臭い宗教は嫌いです。(中略)一元論は孤立者
の宗教であり、祖先崇拜は孤立者の信仰です。しかし、責任は孤立している
ことにあります。宇宙には或る原理があって、人間はそれに向って宗教的に
動いてゆきます。それは宇宙それ自体の生命なのです。

ここで言われている宇宙とは古代人にとっての宇宙と同義であり、宗教臭い

宗教 (religion in its religiosity) とは観念的宗教を言うものである。『アポカリプス論』で述べられている古代観にこの手紙の内容を重ねれば、個人の生命は宇宙の生命につながるものであり、それを信ずることによって人類の連帯感が生ずる、という考え方が理解される。これより1年ほど前の1926年10月11日、ロルフ・ガーディナーに宛てた手紙には次の一節がある。

自己と宇宙との間に、自己と仲間の人間との間により充実した関係を打ち建てねばなりません。それは単に‘キリストを通しての兄弟’というものを切り棄てるという意味ではありません。それは、古代の踊りや祭祀の中にかつて存在したような肉体的で情熱的な会合も有り得る充実した関係に発展させることなのです。第三の聖なる地に出て行って互に会合する方法を我々は知らねばなりません。

ここには若いときから抱いていた理想的な共同体を造ろうとする意欲が語られているのだが、踊りや祭祀という古代の肉体的宗教の具体的再現まで語られていることに、ロレンスの意図が、単に自己の救済ではなく、人類の救済にあったこと、人類の救済なくして個人の救済はあり得ないと考えていたことが示されている。そしてそこには、肉体や生命は決して個人の次元にとどまるものではない、そうあってはならないという認識が根底としてあることが分るのである。ロレンスは個人としての自分が救われることを願ったことはなかった。それは恐らく、彼の生命観の本質がそうさせたのであり、彼の感受性が単なる個人的な豊かさを超えた深さを持っていたことによるのである。彼の創造した人物の生命は如何なる場合でも他者との関連に於て捉えられ、彼の感受性はその向い合った両者を包摂した次元に常に働きかけるのである。

個々の形象毎に情動による思考が行われる古代人の形態においては、矛盾を嫌う理智的論理というものにはなかった。論理とは一度打ち建てられれば、自らが滅ぶまで人間の精神を縛りつけるものである。論理のしがらみを知らなかった古代人は、困難な形象に出会うと、決着を得るまで情動が深まり集中するの

を待つのだとロレンスは言う。それが本当の人間的な生きた力である。古代人はその力を信じていた。『アポカリプス論』をもう少し見てみよう。「異教徒的な思考様式をよく知るためには、出発点から終結点に至るまで連続して前進する現代人の様式を脱却し、精神を円環の中に運動せしめ、一群の形象の上をあちこち飛び廻らしめねばならない。永遠の直線を間断なく流れるという現代人の時間の観念は我々の意識を無残に歪めてしまっている。円環を描いて運動するという異教徒の時間の概念ははるかに闊達で、上下に向う運動をも可能にし、いかなる瞬間にも精神状態の完全な転回を許容する。一つの円環が完成されるや、別のレベルに昇ることも降ることもでき、即座に新しい世界に存在することができる。だが、現代人の時間の連続の方法では、人間は別の峰を重い足を引きずって歩かねばならない。」現代人は自ら案出した論理の重圧のもとに疲弊しているのだ。

ロレンスによれば、こうした生き生きした古代人の世界を抑えつけたのはキリスト教である。彼はキリスト教が宇宙の真理を顛倒させてしまったという。1913年1月、エドワード・ガーネットに宛てた手紙の中で彼は『息子と恋人』への序文という名目で、長々と心情を吐露しており、ヨハネの「ことばは肉体となれり」という言葉を引用して、肉体はことばとなれり」こそ真理でなければならないとしている。「ことばは工芸品のように有限で終りがある。だが肉体は無限で終りが無い。（中略）ことばは一瞬に栄えては消滅する。肉体からすべてのことは出て来たのであり、肉体の中にあらゆる言われるべきことばが宿っている。父は肉体であって永遠に疑いなき存在であり、（中略）子はその父の物言う口にすぎない。（中略）我々人間はことばであって肉体ではない。肉体は我々の手の届かないものである。」父は肉体であり、人間の手に負えるものではないということは、明らかに、生命の肉体性と神秘性を否定したキリスト教に対する古代異教徒の宇宙観からの弾劾である。

ユダヤ人の一神教的精神が古代異教世界を破壊したとロレンスは言う。「ユダヤ人は常に何らかの道徳的或は部族的な意味を押し込めることによって構成の美をこわした。ユダヤ人には構成を拒絶する道徳本能がある。構成、美しい構

成とは異教的で非道德的である」(『アポカリプス論』)。ここで言われている構成(plan, design)は立体的に構築された空間を意味している。古代人の思考様式や時間の観念がそれを示している。だが道德というものはすべてを一平面に圧縮しようとする本性を持っている。道德とは均一的統制を意味するからである。人間の手に負えない肉体の生命の根源は神秘という本性を持っているために、道德の規定を無視して上下に跋扈する。従ってキリスト教は基本的に否定の上に立った宗教である。ロレンスの天性の感受性が生み出した幾多の作品が一神教のもつ観念的道德性を眼中においていないことは明白であるが、1924年7月4日にニュー・メキシコからロルフ・ガーディナーに宛てた手紙の中で、異国での見聞を語りながら、「ロッキー山脈の西寄り、砂漠を見降すこの牧場にいと、我々の青白い顔とかヘブライの一神教的主張などは一片の空文にすぎないことが即座に諒解される。もはや魂などは無用なのだ」と語って、古い人生観への和解と譲歩による復帰を説いている。

ユダヤ一神教のもう一つの害悪はメシヤ思想によって古代異教の人間が有していた純粹個人的な生命の体験にひそむ神秘を否定したことである。それはキリスト教を弱者の宗教にしてしまったとロレンスは考えた。そこに、バビロンの幽囚の体験によって地上世界での覇権をとることを断念したユダヤ人の宇宙に対する嫉妬と怨念があるとロレンスは言う。世界の終末の願望がそこにひそんでいる。終末論は、あくまで地上世界で生きようとする異教徒的宇宙観への恐怖から生まれたものである。「あらゆる異教徒的痕跡を抑圧するやりかたは一種の恐怖本能からきたものであって、キリスト教世界では初めの世紀から今日に至るまで徹底を極め、真に犯罪と言い得るものであった」(『アポカリプス論』)とロレンスは言う。こうしたユダヤ人の歪んだ怨念と恐怖は、キリストが天上で勝利を得た後にも、遠く下界には炎に焼かれる異教徒達の靈魂の苦悶の姿が置かれるまでに徹底している。ロレンスは、「彼等は地獄で敵が苦しんでいることを見極めねば天国で幸福になれないのだ」と断じている。これが地上の世界を捨てたキリスト教の姿である。

すべてキリスト教が肉体を放棄したところに根源があった。だがロレンスに

よれば、古代的宇宙観によればすべてが循環的に生起し消滅してゆくために、放棄された肉体は必ずいずれは立ち上って復讐を遂げる本能を持っている。それを象徴するのがキリストに対するユダの存在であり、聖書中に於ける「黙示録（アポカリプス）」の存在だという。「アポカリプス」に描かれる古代異教の世界は、キリストの存在を語るために歪曲されてはいるが、古代異教の世界が聖書をはみ出て存在感を持つ奇怪なものだという。内なるエホバを見つめることしか知らなかったために、世界の創造と破壊を物語るのに古代異教徒の宇宙観を借用せざるを得なかったユダヤ人の宿命がそこにあった。同じようなことが、聖書にマリアとマグダレインが登場することについて言い得る。「アポカリプス」には、神に捧げられ、諸々の国民を治めんとされる男子を生む女が登場する。日（太陽）の衣を纏った女の足の下には月があり、頭には十二の星の冠があったとされている。こうした母性の輝かしい女神を思わせる神話はキリスト教にそぐわぬ異教のものであり、聖母マリアの原型に他ならないとロレンスは言う。この力強い女神の挿入はユダヤ人の満たされぬ地上の権力への願望が現われたものであると同時に、宇宙の構成に女王を必要とした古代人の考え方がアポカプリストを動かしたのだと彼は考える。やがてこの女は荒野に追われて姿を消すのであるが、本来聖書に欠けていた女神の要素が突然挿入されて姿を消した事情について、ロレンスは次のような皮肉を言っている。「悪魔というものは表口から追い出したと思うと裏口から入り込んで来る、という古い法則を受け容れるより、その間の事情は納得のしようがない。」かくして、キリスト教は自らが追い出した悪魔の復讐を受けることを自身で認めている如き体裁となる。そこにキリスト教を越えた宇宙の摂理を見ることができる。悪魔も宇宙に本来含まれているからである。セシル・グレイに宛てた手紙の中でロレンスはマグダレインについてこう言っている。「もしイエスがマグダレインにもっと注意を払って使徒達にもっと少い注意を払っていたら、もっと良い結果になっただろう。破壊的なのは彼女が薬膏を注いだことではなく、十二人の人間の使徒振りにあったのだ。（中略）彼女が服従しイエスの足を洗ったことを別にしても、マグダレインとイエスの間には、使徒達とイエス、イエスと

ベタニアの女達との間より、純粋な理解が深く進んでいたのだ。だが、イエスはマグダレインと自分の間にある知識を恐れていた。それは、キリスト教と「善」の知識よりも深く、愛よりも深い知識だったのだ。」十字架のそばに彼女が立ち、復活したイエスが先ず彼女に姿を現わすのは、やはり聖書に対する悪魔の復讐である。そしてロレンス自身は「死んだ男」によって更に復讐の追い討ちをかけた。

元来宇宙は初めも終りもなく存在しているものであった。地上の勝利を捨てたユダヤー宗教はそこに創造主をもうけて必然的にそれが破壊主にもなり、その人物を救世主と仰いで宇宙を矮小化してしまった。肉体を否定したキリスト教は愛する実体を失った人間に愛を強要する奇怪な宗教となった。個人的なものにせよ、集団的なものにせよ、愛は生命の流動であり、生命は肉体に宿るからである。平板化した宇宙と死せる愛をキリスト教は観念的道德で糊塗し、神という統一概念で自ら放逐した悪魔から身を守ろうとしたのであった。その結果、神は概念にすぎないが悪魔は実体だという悲劇を人間にもたらしたのである。

ロレンスはあくまで自らの感受性という直感で生命を捉えてきた。その生命が宇宙の中でどんな在り方をしているかを少し考えてみたい。1913年1月17日、アーネスト・コリングスに宛てた手紙の一節がある。この直前に、自分の宗教は血と肉を信じることであり、頭脳は誤ちを犯すことがあるが、血が感じ、信じ、言うことは常に真実である、と言っている。

僕は人間の肉体はろうそくの炎のような一種の炎だと考えている。それは常に真直ぐに立ち、しかも流動している。知性というものはその周囲のものに向って流れた光にすぎない。僕は周囲のものには大して関心はない。（それは実は精神なのだ。）僕の関心は、実際にどこからともなくやってきて（こういう風にかはさっぱり分らないのだがね）、周囲にあるどんなものを照らしだそうと、あくまでそれ自身であるところの、永久に流動する炎の神秘にあるのだ。我々は滑稽なほど精神的になっているので、自分自身が何ものか

であることが分らなくなり、自分が照らしだす物体しか存在しないと思っているのだ。哀れな炎は見捨てられて燃え続け、この光を造り出している。

炎に比しているのは偶々ロレンスが比喩に長けていたからではない。炎は生命の象徴であり、光は意識の象徴なのだ。炎は人間の意識を越えたところからやって来るのだが、その発する光は人間の意識であって周囲の事物を明晰にする。そこから人間の錯誤が生じて、自分が炎であることを忘れてしまう。炎には自分が何故燃えているのか分らない。ただ燃える実体であることしかできない。生命とは意識されずに発動するものなのである。ロレンスはよく無意識の暗闇に沈潜すべきであると言うが、それは自分の出す光を認識の根源と錯覚してはいけないということであり、炎であることに静かに埋没すべきことを言うのである。やがておのずから生命は発動するとロレンスは考える。1925年6月6日のトリガント・パロウ宛の手紙では、「人間は決して知ることはできないし、理解することもできない。ただ、急流の鱈のように泳ぐことができるだけだ」と言って、知っているつもりになって石のように沈んでいる人間を嘲笑っている。

この無意識なるものの実体は捉えにくい。ロレンスはむしろ捉えられないと言っていて、その発動が感知されるにすぎない。『精神分析と無意識』では次のように言っている。「それは思い浮かべることのできないものであり、個々の刹那刹那に体験できるものにすぎない。思い浮かべることができないから我々は無意識と呼ぶことにするのである。」本人にこう言われては我々は如何ともし難いが、実は、「刹那刹那に体験できるもの」という点に鍵がある。そして、その刹那の体験を受けとめる烈しさの違いにロレンスの感受性と他の人間のそれとの隔絶があると言ってもよい。1920年にアメリカで出版された詩集の序文から少々長く引用する。

永遠に現存する生命には終局性もなく、完結した結晶化もない。完全なバラの花も走り去る一つの炎にすぎず、浮上しては流れ去ってゆき、如何なる

意味に於ても休息することはなく、静止することも完結することもない。ここにバラの超絶的な生き生きした姿が宿っている。全生命、全時間の潮流全体が突然盛り上って我々の前に幽霊の如く現われる、啓示のように。我々は生まれようとする創造の白い中枢を目の当りに見る。水蓮が流水の中から身を起こし、あたりを見廻し、輝いて消えてゆく。我々は永遠に渦巻く流水の化身、その中枢を見たのだ。我々は不可視のものを見たのだ。我々は、創造的变化、創造的変転の本体そのものを見、それに触れ、それに関与したのだ。蓮の花の話を聴かせてくれるのなら、不変なもの、永遠のものなどはごめんだ。尽きることのない、永遠に展開してゆく創造の火花の神秘こそ聴きたいものだ。我々の前で全身を隠そうともせず花開き、微笑み、そして完全に朽ちてゆく流動と変動と変転の化身の姿を語ってほしい。

（中略）固定された静的なものはごめんだ。無限なるもの、永遠なるものは欲しくない。無限や永遠は欲しくない。静かに白く煮えたぎるもの、化身の瞬間の白熱して冷却した姿が欲しいのだ。その瞬間、すべての変化と迅速な動きと反撥の中枢を欲しいのだ。その瞬間こそ即刻の今、「現在」なのだ。この即刻の瞬間は流れを下る水の一滴ではない。それは源であり、出口であり、泡立つ流れそのもののなのだ。正にこの全き瞬間に於てこそ、時の流れが泡立って未来の泉から過去の大海へと流れてゆくのだ。時の源、時の出口、創造の中枢なのだ。

詩集の序文らしい昂揚した文章であるが、ロレンスの捉えた生命の発動の在り様が生き生きと語られている。このようにしてしか無意識の世界を知ることにはできないのだが、そこに時間の観念も挿入されていることに注目したい。時間も実は無意識の中に包まれていて、生命の発動の瞬間として意識されるにすぎない。未来も過去も感じとることはできない。つまり、時間も「刹那刹那に体験できるにすぎない」ものである。生命の発動を体験することは、無意識の世界の空間と時間双方の啓示の刹那を体験することである。意識の深化とは、この刹那を捉える直感の強烈な深まりと積み重ねを言う。そしてこの刹那こそ

真の時間であり、宇宙の生命が眼に見える姿となって現われる神秘の時間なのだ。ロレンスは、永遠とか無限は観念の産物であって、この刹那こそ生きた実体を持つ時間であると考えた。従って、ロレンスにとって時間の探究はこの刹那の探究に他ならない。それは観念や抽象では捉えられないものであり、生命であること、その刹那を生きることと同義であった。彼の人生と文学は、彼がその探究に如何に身をやつたかを証明している。人生も文学も彼にとっては遍歴という形態をとる宿命を担っていた。

女性や友人との交際も多岐に亘っており、様々な土地に足跡を残した。そして、刹那の探究が満たされなかった時、彼は友人を憎悪し、土地を憎悪した。

ロレンスは小説を自己表現の最高の手段と考えた。「何故小説は重要か」と題する小文で彼は次のように断言している。「小説家であるが故に私は自分を聖者、科学者、哲学者及び詩人より優れていると考える。彼等は生きた人間のそれぞれの部分を掌握しているが、全体を把握することはないからである。」ここで言われている全体が何を意味しているかは刹那の探究を考えれば理解される。人間は刹那においてのみ生命を持つからである。彼は体験した様々な生命の瞬間を軸にして創作していったが、作品に固定した形式を当てはめたり、伝統的な原則に従ったりすることを殆んどしなかった。自分の体験した生を充分に醗酵させ燃焼させる形式を見出すことだけが重要であった。特に彼の十篇を越す長篇小説はすべて異なった形式によっていると言ってよい。それは彼の考えた生命に固定した形式がないことに応じていた。1913年2月24日のアーネスト・コリングズという画家に宛てた手紙で次のように言っている。「仕事に入る前に、お祈りをして神さまにお任せすべきではないかと僕はしばしば考えるのだ。自分の想像力と真剣に格闘して、すべてを船外に投げ出してしまうのは全くつらい仕事ではないか。僕はいつも全能の神の火が僕の中を通りすぎてゆくままに裸で立っているような気がする。恐ろしい気持だ。それほど厳しく宗教的にならねば芸術家にはなれないのだ。」刹那の探究を命がけで追っているロレンスを想像すると、「全能の神の火が僕の中を通りすぎてゆく」という言葉も単なる比喩ではないと思われてくる。その刹那に文字通り彼の神を感じて

いたに相違ない。

1912年11月14日のエドワード・ガーネットに宛てた手紙の最後をロレンスは次のように結んでいる。

生意気なことを申し上げましたが、お気になさらないで下さい。ここで人と離れて生活していると非常に変ります。一種の権威を得たような気になるのです。

この時ロレンスは編集者ガーネットに『息子と恋人』の原稿を送って、自信あり気に年輩者に語りかけている。彼が生意気であったかどうかはどうでもよい。「人と離れて生活していると権威を得たような気になる」という言葉が彼の一生を暗示し象徴していることである。「離れている」とは必ずしも物理的な面だけに限らなくともよい。彼は人との交際を好む人間であったが、心の中に常に人と離れた世界があり、常に彼の視点はそこに定められていたからである。その距離感は彼の視力を幾倍にもしたに相違ない。彼の独断めいた言辭は、その距離感が常に誤たず捉える射程距離に応じてぼんぼん撃ち出される。それは彼の力ともなったが、悲劇でもあった。何故なら、すべてのものに距離を置かざるを得なかったからである。

彼は刹那の探究を世界の様々な土地で求めた。生命の根源は一つだという確信が根底にあり、信じ難いほどの探究を実行した。だが、結局それが逃避であったことを彼は知らされることになる。「根源に遡れば、すべての民族の根は一つだ。一つの根から多くの枝が生ずる。枝同士は決して交わったり‘了解し合ったり’はしない」(1924年10月3日、マリーへの手紙)。『翼ある蛇』は予期しない強大な壁がロレンスの前に現われたことを意味していた。彼がぶつかった壁は自分自身が建てた壁であった。残された僅かな道がイギリスに帰ることにしかあり得ないのは当然の帰結であった。だが、「イギリス人は勝利にすら倦むほど年老いている」(1928年1月7日、ロルフ・ガーディナーへの手紙)。

『チャタレー夫人の恋人』の優しさの持つ悲しさはここにある。悲しさが壁を

破ることができないのはロレンスが自らに課していた宿命である。

キリスト教は出発点から悲劇の因であった。人間の意識的理智と思考はもう一つの悲劇を生んだ。「例えば現代の文明を見よ。現代人は自分がやっと得たものがお気に召さないで憤慨している。しかも、千年も費して打ち建てたものは今になって改造することはできない。挙げ句の果てに現代人は文明を憎悪するに至る」(「書物」)。よるべのない現代人はセンチメンタリズムに埋没するだけである。ロレンスによれば、センチメンタリズムとは「自分が本当に強く感じてもない感情を自分に押しつけること」である(「ゴールズワージー論」)。

ロレンスの看破した生命の相は偉大な真理であった。だからこそ彼は狡猾な時代に血を吸いとられて仆れたのである。ロレンスの悲劇は真理と時代の悲劇の軋轢による悲劇であるが、現代の文明はその真理の養分を吸収して己れを増長させる醜惡な論理を含んでいる。そこに測り知れないもう一つの悲劇がかくされている。